

## 勿来の地域活性化に向けて

いわき市漁業協同組合勿来青壮年部  
大友 章吉

### 1. 地域及び漁業の概要

勿来は、福島県浜通りの最南端にあり、産業・観光面から見ると、人口が多い首都圏に最も近いという好条件を有する。更に「勿来海水浴場」は、県内随一の広さを誇っている。

いわき市漁協勿来支所の平成18年度当初の組合員数は73名、漁船数は60隻であり、底びき網漁業、船びき網漁業、はえなわ漁業などを行っている。

### 2. 活動グループの組織と運営

当青壮年部は、昭和50年代前半に「勿来漁具漁法研究会」を改組して発足した。発足前後はシラウオ船曳網漁具改良やホッキガイ資源管理等の活動を、近年では海浜清掃、漁青連行事への参加等の活動をしてきた。現在部員は18名である。

### 3. 活動課題選定の動機

勿来では、水産資源の減少、漁場環境の悪化、燃油高騰等により、漁業経営は厳しくなっている。更に、レジャーの多様化等により「勿来海水浴場」の集客力が弱まるなど、地域の活力も低下しているように思う。

個人的な話で恐縮だが、私は長年にわたり青壮年部長を務め、漁青連の会長・副会長も務めさせていただいた。そして、この間、漁業の振興は勿論、地域の活性化についても考えさせられることが多かった。昨年8月に漁青連会長を退任したこの機に、地域活性化に関連する現在の活動や今後の課題について、発表させていただくこととした。

### 4. 実践活動の状況及び成果

#### (1) 漁業の振興を通じた活性化(定着性資源の活用)

地域を活性化する方法は色々あるだろうが、漁業者としては、生業である漁業の振興を通じて活性化できれば一番良いと考えている。勿来では、船びき網の好・不漁の変動が大きいので、定着性資源を活用して水揚げを安定・増加させて、地域活性化につなげられれば良いと思う。

#### ホッキガイ

勿来のホッキガイ漁は、昭和53年の大量発生を受けて始まった。操業は、資源を持続的に利用するためにプール制により共同で行った。大量発生は昭和63年にも起こり、最大で年間約70トン、5千万円近い水揚げを記録した。なお、ホッキガイ資源管理の活動については、私を含め数人が活動実績発表し、全国大会に出場したこともある。

その後、単価の下落等により操業日数は減少し、平成13年を最後に操業休止に入ったが、平成15年、水産試験場調査船「拓水」の採泥による稚貝調査により、菊多浦を含む県の広範囲でホッキガイの大量発生が確認された。操業再開に期待した私たちは、平成18年3月に、漁船を使ってホッキガイ大量発生群の追跡調査を行った。調査は、通常の操業で使用する「合わせマンガ」を用い、2隻で9定点を曳網した。しかし、平成15年生まれのホッキガイは少ししか採集できず、操業再開の期待を失いかけていた。

ところが、平成18年11～12月に、「拓水」が採集効率の高い「噴流式マンガ」で再度調査したところ、場所によっては平成15年生まれのホッキガイが、かなりの量採集できたそうだ。現在、水産試験場で調査結果を解析中であり、結果がまとまったら詳しく話を聞くことにしている。

## アワビ

勿来では、昭和40年代後半にアワビ漁業が始まり、昭和50年代までは2～4トン前後の水揚げを記録した。しかし、漁場の減少や密漁等により、近年の水揚げは1トン未満と低迷しており、平成15年から放流種苗数も減らした。

種苗放流は、潜水して付着器を海底に設置する方法で行っている。今年度は、小浜採鮑組合で種苗を海水に浸して動きを良くしてから放流していることを聞いて、導入することとした。海水に浸したのはごく短時間であったが、種苗の動きが良くなったのを確認できた。少しでも歩留まりが良くなることを期待している。

## イワガキ

アワビ・ウニ漁の合間に、仲買人から頼まれてイワガキを漁獲する人がいる。私もその中の1人である。仲買人に聞くと、勿来のイワガキは粒が大きく評判が良いそうだ。資源量は必ずしも多くはないが、ある仲買人が首都圏への出荷を検討しているとの話もあり、今後も期待が持てる魚種だと思う。

## (2) 漁業体験活動

いわき市では、平成12年度から、都市の親子を対象とした、2泊3日の農林漁業体験イベントを開催している。前半は漁業体験、後半は農林業体験を行い、漁村と農山村にそれぞれ1泊するスケジュールになっている。漁業体験では、漁船乗船体験、釣り体験、魚のさばき方教室、地びき網体験などを行った。

このイベントは今年度7回目を迎えたが、勿来では既に3回（平成12、16、18年）実施した。いわきには漁港がたくさんあるのだが、準備作業が大変であり、船どめしなければならぬ日も出てくることから、なかなか実施できない地区もあるようだ。イベント前や当日は忙しくて、愚痴を言いたくなる時もある。他にもそういう人はいると思うが、それでも、本番になると全員が一致団結して笑顔で参加者を歓迎し、イベントを盛り上げている。初めて漁船に乗った子供の歓声や、魚の料理方法について色々質問する母親の様子など、準備に苦労した分、味わえる喜びは大きい。

なお、地びき網については、このイベントが始まる前から体験活動を実施している。根強い人気があり、今年度は地元新聞にも掲載された。

### (3) 異業種交流

地域や漁業を活性化するには、他地域や異業種との交流を図ることも必要だと思う。私に関わった異業種交流として、平成15年7月の「地域フォーラム」が挙げられる。これは、JAや漁連が共同していわき新舞子ハイツで開催したものである。会議の中で、農林水産業の多面的機能について農・林・水産業の代表者、消費者代表者らが発言しあうこととなり、漁業者代表として漁青連会長である私が発言した。

### 5. 波及効果

これらの活動により、私たちの絆が強くなったし、自分自身の成長にもつながった。特に、私が漁青連会長だったおかげで、「地域フォーラム」を始めとする様々な会議に出席したり、県庁、全国漁青連等多くの組織と関わりを持てたことは、限られた人しか経験できないとても貴重なことであり、嬉しい限りである。余談ながら、地区によっては、青壮年部長などの役員が、組織の活動についてやっとわかった頃に交代する例がある。色々な事情があると思うが、役員はある程度長期間経験した方が良いと個人的には思う。

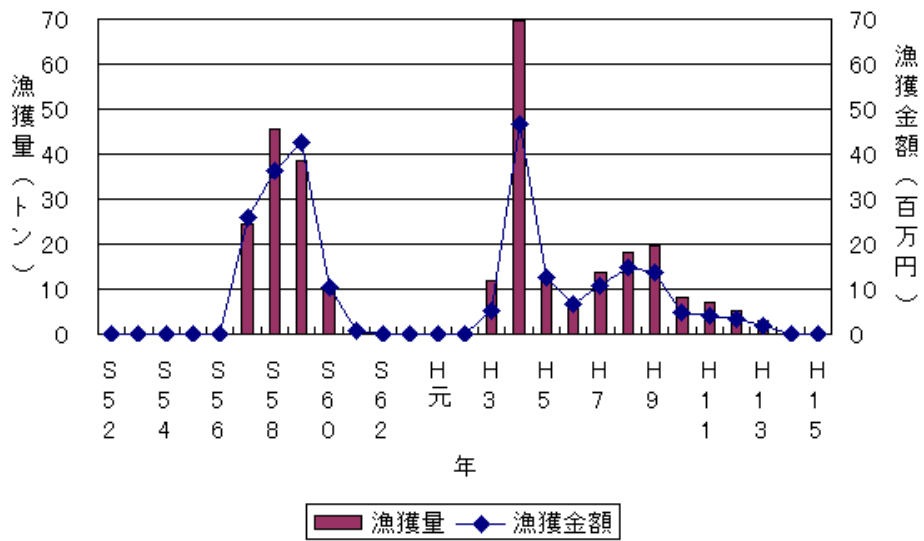
また、漁業体験活動の参加者には、海の生物や漁業について理解を深めてもらえたと思う。この経験を機に、参加者が水産物の消費拡大や、釣り等海洋レクリエーションの際のマナー向上等に少しは留意してもらえるようになったのではないだろうか。

### 6. 今後の課題

ホッキガイについては、もし平成15年生まれの資源量が操業再開できるレベルであれば、具体的な漁場利用の方法や付加価値形成の方法等、実際の操業を想定した検討を進める必要がある。

アワビについては、勿来地先では天然漁場が狭くなっているため、新たな漁場開発が望まれる。勿来地先には、海岸保全の目的で近年設置された「人工リーフ（潜堤）」があるので、水産試験場において漁場としての利用の可能性を調査していただいているところである。もし人工リーフが漁場として活用できれば、アワビの生産力は飛躍的に高まるので、今後、水産試験場と情報交換しながら検討していきたい。

この他の地域活性化策については、漁業者だけでできる活動には限界があるので、一般住民に呼びかけていく必要もあると思う。勿来には「勿来ひと・まち未来会議」というまちづくり団体があり、フリーマーケットの開催等の活動をしているので、連携できればと考えている。



勿来のホッキガイ漁獲量・金額の年変動



「合わせマンガ」による調査 (18年3月)



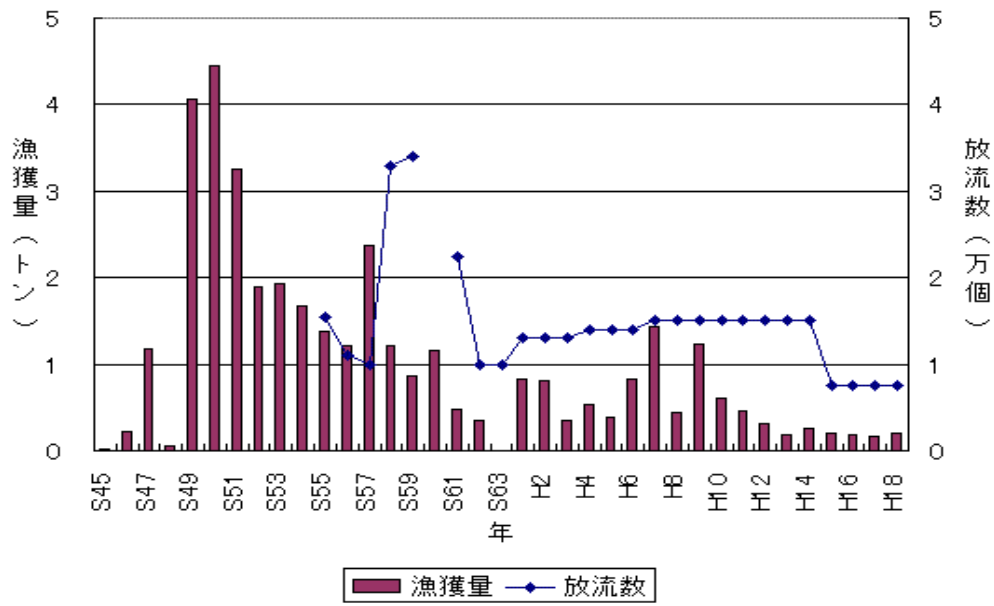
採集されたH15生まれのホッキ稚貝



「噴流式マンガ」



採集されたH15生まれのホッキ稚貝



勿来のアワビ漁獲量・種苗放流数の推移



アワビ放流種苗



種苗放流



漁業体験イベント（漁船乗船体験）



漁業体験イベント（釣り体験）



漁業体験イベント（魚のさばき方教室）



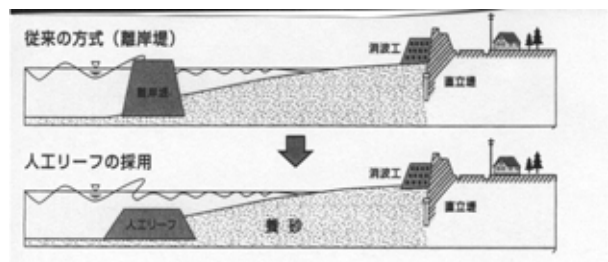
「地びき網体験」の新聞記事



県農林水産部長への要望活動



第12回全国漁青連総会に出席



人工リーフ（潜堤）